

義務教育教科書に関する教師の意識及び保護者の要望についての調査 調査結果報告書〈最終報告〉(要旨)

平成20年9月20日
財団法人教科書研究センター

第1章 調査の趣旨と概要

I. 調査の趣旨

平成20年3月に小・中学校の学習指導要領が改訂され、平成21年度以降それに伴う教科書検定が行われることにかんがみ、教科書会社における教科書の編集に役立てるため、教科書に関する教師の意識や保護者の要望について調査を行うとともに、その結果を分析し、提言をまとめた。

II. 調査の概要

調査票の設計や結果の分析を行うため、研究者、教科書会社の編集員、小中学校の関係者からなる調査委員会(委員長 新井郁男上越教育大学名誉教授)を設け、平成19年9月から10月にかけて調査を実施した。

調査は、無作為抽出により、教師については、小学校205校の教務主任と第5学年の学年主任、中学校404校の国語、社会、数学、理科、英語の主任、保護者については、小中学校とも各県一校の一学級分の保護者を対象とした。

回収率は、教育委員会を通さないで学校宛てに直接実施する調査としては8割と非常に高かった。

設問は、教師については、小中学校に共通のものと、各教科別のものに分かれ、保護者については、小中学校とも同じとした。また、両者とも教科書について日ごろ感じていること、改善すべき点などを自由記述させたが、その数は、教師で980余、保護者で1250余あった。

第2章 調査結果の分析

I. 調査全体を概観して

- 回収率の高さや自由記述の多さからみて、教師も保護者も教科書について高い意識・関心を持っており、さまざまな意見を持っている。
- 全体としては現状は肯定されているが、多くの改善の視点や方向が示唆されている。

II. 教師と教科書

1. 各教科の視点から

1 国語

- ふだんの授業で教科書を中心に使う割合（「教科書を主に使う」と「教科書だけ使う」の合計）が、小・中学校とも各教科中一番高い90%台後半であり、教科書の果たす役割が大変大きいことを示している。
- 使いたい教科書（教えるための教材と自ら学ぶための学習材）については、小・中学校いずれも「両方のバランスが保たれた教科書」が一番多いが、次いで「どちらか」というと教えるための教材としての性格が強い教科書を望む声が相当あり、教材としての性格を支持する声も一定程度ある。なお、教員歴とのクロス集計では、教員歴が長くなるにつれ学習材としての性格を求める傾向がある。
- 体様については、
 - ・ ページ数や本文の分量は、小・中学校ともに「現行程度」が一番多い。「増やす」は国語の特性からか他教科に比べると少ないが、教員歴が長い教師や国語を得意とする小学校教師は、ページ数の増を求めている。
 - ・ カラーページは、小・中学校とも各教科中「全ページ」の比率が一番低く、言葉が主体である国語ではビジュアル化が求められていない。
 - ・ 「発展的な学習内容の分量」については、「現行程度」が一番多いが、国語科の特性か「減らす」が他教科に比べ多い。逆に、「注、コラム、資料などの分量」では「増やす」とする回答が多い。
 - ・ 「さし絵、図、表、写真などの大きさ」、「文字の大きさ」については、「現行程度」という意見が多数を占める。
 - ・ 判型については、小・中学校とも「現行程度」が多数であるが、中学校では「小さくする」も比較的多く、自由記述にもその旨の意見が多かった。
 - ・ 「書き込み、貼り付け、切り取り」については、「現行程度」が一番多いが、他教科と比べ「増やす」が一番少なく、「減らす」が一番多い。
- 小学校国語教科書への要望については、「文学的文章では定番教材の維持」が一番多く、文学作品を重視し、定番教材を使いたいという要望が強い。また、PISA型読解力として注目を集める「批判的読解力が身につく教材」という要望は少ない。「読むこと」以外の領域では、「話す・聞く」教材ではもっと話し方や聞き方を身につけさせる指導ができるようにしてほしい」という意見が多い。
- 新指導要領で小学校に導入される古典については、「遊びの中で古典に触れさせる」という意見が圧倒的であった。
- 中学校の「読むこと」の教材については、文学的文章への期待が依然大きく、近代文学の名作を教材とすることを望んでいる反面、生徒の現状に合わせた教材

を望む教師も多くあり、伝えたい教材と授業でやりやすい教材双方を望む志向が伺える。また、PISA型読解力の関係もあってか、説明的文章では構成に注目した教材が期待されている。

- 小学校への古典の導入に伴う中学校における扱いについては、現行支持が多く、いわば様子見の状態になっている。
- 「話す・聞く」、「書く」教材については、文学的な創作よりも「身につける」・「実用的」という実践的な側面への期待が大きい。

2 社会

- 小・中学校ともに、授業で「教科書と他の教材を半々」とする割合が他教科に比べ高く、20%台を占める。これは社会科が内容教科であり、多種多量の資料や調査活動を必要としているためと考えられる。
- 使いたい教科書については、小・中学校ともに「教材、学習材両方のバランスのとれた教科書」が一番多い。ただ、小学校では、「教材」よりも「学習材」を選ぶ割合が高いのに対し、中学校では「もっと教えたい」と考えているためか逆に「教材」を選ぶ割合が高い。
- 体様については、
 - ・ ページ数や本文の分量は、小・中学校ともに「現状程度」が最も高いが、「増やす」は中学校で高く、特に歴史的分野で顕著になっている。また、中学校では経験年数が増えるほどページ数、本文の分量を「増やす」と答える比率が高くなる。
 - ・ カラーページは、小学校は「全ページ」が「必要部分だけ」を上回っているが、中学校では「全ページ」が半分以下であり、カラーページにこだわっていない。
 - ・ 「発展的な学習内容の分量」は、「現行程度」が最も高い。小学校のほうが中学校より「増やす」が多く、「減らす」が少ない。
 - ・ 「注、コラム、資料などの分量」は、小学校では「現行程度」と「増やす」が拮抗しているが、中学校では「現行程度」が最も高い。
 - ・ 「さし絵、図、表、写真などの数」は、小・中学校ともに「現状程度」が最も高いが、中学校になると「増やす」が低くなる傾向がある。これは中学校の社会科教師が本文そのものの充実を求めているためと思われる。
 - ・ 「調べ学習の数」と「書き込みなど」は、小・中学校ともに「現行程度」が一番多いが、小学校で「増やす」が、中学校で「減らす」が多く、中学校では「調べ学習」や「書き込みなど」をさほど重視していない傾向がある。また、小学校では「調べ学習」は社会科が得意か、教員歴が長いほど「増やす」の回答率が高くなっている。
 - ・ 「さし絵、図、表、写真などの大きさ」「判型」は、小・中学校ともに「現行程度」

が最も多い。

- 「社会科教科書の現状」については、小・中学校とも「主体的、能動的学び」と「学習を発展させるための手立て」に同感し、「個人差に応じた指導」に同感していない傾向がある。平成4年の調査に比べ「学習を発展させるための手立て」や「他教科との関連づけ」が改善され、生きる力の育成の趣旨を踏まえた教科書が作成されていると考えられる。ただし、「個人差に応じた指導」に関しては依然として改善されていない。なお、中学校の地理では「身近な地域の取り上げ」が高い評点を示している。
- 「社会科教科書の望ましいあり方」については、小・中学校ともに「主体的、能動的学び」が一番高いが、二位は、小学校と中学校の地理では「身近な地域の取り上げ」中学校全体では「学習を発展させるための手立て」となっている。
- 「学習指導における社会科教科書の役割」については、小・中学校とも「興味・関心・意欲」「思考・判断」「資料活用能力」「知識・理解」の全項目において平均評価点を上回り、社会科教科書の役割についての評価は高い。平成4年調査と比較すると平均評価点を下回っていた中学校の「興味・関心・意欲」に大きな改善がみられる。
- 「今後の社会科教科書の役割として期待すること」については、小・中学校ともに「知識・理解」が一位を占める。特に、中学校は高率で、教師の意識は、「興味・関心・意欲」より、「知識・理解」重視にある。

中学校の三分野を比較すると、地理では「知識・理解」よりも「資料活用能力」が高く、「思考・判断」は極めて低く、技能重視の特徴がみられる。歴史では「知識・理解」がとりわけ高く、「資料活用能力」は極めて低く、習得すべき事項・知識が多いという歴史学習の特性と教科書とともに歴史資料集を用いて学習しているという実態が伺える。公民では「思考・判断」が高く、「資料活用能力」が極めて低く、現代社会の諸事象を学習するために問題解決学習的思考・判断が必要となる公民の特徴を表している。
- 「社会科教科書を使用している場面」については、小学校では「学習課題・問題の設定場面」が一位であるが、中学校では「学習のまとめの場面」が一位となっていて、既習事項・知識の定着化を図ろうとする傾向を表している。また、「学習の自己評価」は小・中学校ともに極めて低率であり、自己評価という観点において教科書は全く機能していない。
- 「今後の社会科教科書に充実を期待する場面」については、小・中学校ともに「学習課題・問題の追及」「学習の動機付け」「学習課題・問題の設定」の場面の順となっており、「導入」と「展開」の学習活動の場面における期待が大きい。また、「学習の自己評価」の場面への期待度が多少高くなっており、この場を

教科書に取り入れる工夫も必要となってこよう。

3 算数・数学

- 算数・数学は、教科書を中心に教える割合は高く、教科書は教科指導の主たる教材として大きなウエイトを占めている。
- 「教材」と「学習材」については、算数では「教材」と「バランスのとれた教科書」が拮抗しているが、数学では「バランスのとれた教科書」を望む割合が高い。抽象度の強まり、子供の発達段階により教科書の性格も変わるものと推測される。
- 体様については、
 - ・ ページ数や本文の分量は、「現行程度」が一番多いが、「増やす」が1/3近く占めていることは注目すべき。
 - ・ カラーページの割合は、「必要な部分だけ」が算数で1/2、数学で2/3を占め、効果的な場面のみカラーが求める意見が多い。
 - ・ 「発展的な学習内容の分量」は、「現行程度」が多いが、「増やす」が1/3強あるのは、学習内容の厳選の影響と思われる。
 - ・ 「注、コラム、資料などの分量」は、「現行程度」が多いが、「増やす」が1/4あり、増やすことも考慮すべき。
 - ・ 「さし絵、図、表、写真などの大きさ」、「文字の大きさ」、「判型」は、「現行程度」が肯定率が高い。
 - ・ 「定着のための練習問題の数」については、算数、数学とも「増やす」が「現行程度」を大きく上回っている。基礎・基本の徹底、定着のための繰り返し練習の観点から、自由記述においても今の教科書では練習問題が少ないという意見が多く、特に数学で顕著になっている。
 - ・ 「さし絵、キャラクターの数」は、「現行程度」が大勢であるが、「減らす」が高く、特に数学では1/4を占めることに留意すべき。
 - ・ 「書き込み、貼り付け、切り取り」は、「現行程度」が多いものの、ばらつきがあり、また、自由記述も様々で、意見が分かれる。
- 「教科書の難易度」については、「現行程度」が7割を占め、残りのほとんどは「現行より難しく」であるが、これは算数・数学の指導内容が従前に比し、縮減されたためと推測される。
- 「作業的・体験的な活動など算数・数学的活動」については、「現行程度」と「増やす」がともに5割程度あり、意見が分かれた。
- 「考え方や理由などを答えさせる記述式の問題」については、6割が「増やす」と回答し、学習の結果だけでなく、過程も評価し、それを表現することを価値あ

るものと考えていることが現われている。

- 「習熟度別指導への対応」については、算数と数学で異なった結果となった。算数では、「教科書でも必要」という回答が「教科書では不必要」の倍であったのに対し、数学では、両者とも40%程度であった。これは数学では従来から習熟度別学習の指導の土壌があり、教科書に対する要求がそれほど高くならなかったと思われる。
- 「数学の基礎・基本のなかでもっとも重視している力」については、「問題解決力」と「論理的な思考力」がともに40%を超えているが、「説明するなどの表現力」は1割にとどまっている。
- 「数学の教科書の改善・充実のなかでもっとも重要な内容」については、「練習問題の充実」が4割弱、「思考力を養う問題の充実」が1/3、「導入教材の充実」が1/4となっている。

4 理科

- 授業での教科書の使い方については、国語や算数と同じく教科書重視であるが、小学校に比べ、中学校では「教科書だけ」の割合は大幅に減少し、その他の教材のウエイトが高くなる。これは、小学校が全科制指導であること、理科における教科書の機能から考えて妥当である。
- 使いたい教科書については、小・中学校とも半数の教師が「教材と学習材のバランスのとれた教科書」を選択しているが、小学校が全体として分散しているのに対し、中学校では教材としての性格を多く選んでいる。
- 体様については、
 - ・ ページ数、本文の分量は、「現行程度」は他教科と同じく60%台であるが、「増やす」の意見の割合が高く、「減らす」はほとんどない。また、経験年数の多い教師や理科の得意な小学校教師は「増やす」要望が高い。
 - ・ カラーページの割合は、小学校では「全ページ」が6割を超えるが、中学校では3割にとどまり、現行教科書ほどのカラー化は要望されていない。
 - ・ 「注、コラム、資料などの分量」は「現行程度」が50%台であるが、「増やす」が他教科に比べ高く、増やす方向が求められている。
 - ・ 「さし絵、図、写真などの大きさ」、「文字の大きさ」、「判型」は「現行程度」が多く、おおむね満足されている。
 - ・ 「さし絵、図、写真などの数」は、小学校では「現行程度」が50%台で「増やす」が40%あり、増やすことが求められている。中学校の第一分野では、「現行程度」が比較的高く、「減らす」も少なくない。第二分野では、「増やす」を要望する声が多い。

- ・「書き込み、貼り付け、切り取り」は、小・中学校どちらも意見が分かれている。
- 「教科書に載っている観察・実験の実施」については、小・中学校ともに8～9割がほぼ実施している。
- 「教科書に載っていない観察・実験」については、中学校では「積極的に」、あるいは「必要に応じて」取り上げるが80%あるが、小学校では教科書に記載された観察・実験に依存する傾向が高い。また、自由記述で地域性の問題から観察等が実施されにくい状況が指摘されている。
- 「観察・実験手順の記述」については、「少しわかりにくい」、「わかりにくい」が2～3割あり、さらにわかりやすい記述への改善が求められている。
- 「安全面の配慮の提示」については、小・中学校とも10%程度が不適切としており、その理由は「説明が足りない」としている。特に、経験年数の足りない教師は不適切とする割合が高い。
- 「生徒の興味・関心を高める内容の掲載」については、小・中学校とも80%程度が適切であるとしており、概ね要望に応じていると思われるが、経験の浅い教師はより充実してほしいと考えている。
- 「新しい科学の知見や先端技術に関することの掲載」・「環境や環境の保護に関することの記載」については、小・中学校とも20%台が「不適切である」と答え、その理由として「少なすぎる」ことを挙げている。3～4年で改訂される教科書が仮設段階での情報や最先端の情報の紹介が困難な側面もあるとしても、最新の情報を載せる努力が求められている。
- 「生徒と日常生活と関連することの掲載」については、小学校では3割近く、中学校では4割近くが「少なすぎる」を理由に「不適切である」と答えており、上記以上により強く改善が求められている。
- 中学校の「自由研究のテーマ例」については、第一分野、第二分野とも70%の教師が参考にしている。

5 英語

- 授業での教科書の使い方については、「教科書を主に使う」が70%超、「教科書とその他が半々」が20%弱、「教科書だけ」が7%で、「教科書をところどころ」や「教科書をほとんど使わず」はほとんどない。
- 使いたい教科書については、「教材、学習材のバランスのとれた教科書」を望む者が約6割、「教材としての性格が強い教科書」を望む者が1/4程度、「学習材としての性格が強い教科書」を望む者は12%強に過ぎない。
- 体様については、
 - ・ ページ数、本文の分量、「注、コラム、資料などの量」については、「現行程度」

が多いが、本文の分量と「注、コラム、資料などの量」は増やすことを望む教師が多い。

- ・「文字の大きさ」、「さし絵、図、表、写真などの大きさ」は「現行程度」で異議がない。
- ・「練習問題、体験学習の数」は増やすべきと考える教師が半数近くいるが、「発展的な学習内容の分量」は「増やす」「減らす」がほぼ同率であり、多くの教師は「現行程度」でよいと考えている。
- 「「聞く・話す」の構成」については、「読む・書く」とのバランスをとってほしい」が最も多く、次いで「今程度でよい」、「もっと基礎学力を」と続き、「もっと重点化すべき」は少ない。ただし、「教科書だけ」のグループは、「もっと基礎学力を」「もっと重点化すべき」が多い。
- 「900程度の語彙数」については、「今程度でよい」がもっとも多く、「目減りを考慮して多く出すべき」が続き、「精選、減らす」は1割程度と少なく、「語彙制限は必要ない」はごくわずかであった。ただし、「教科書だけ」のグループは「精選、減らす」が多い。
- 「言語事項の扱い」については、「今程度でよい」が2/3程度であり、「少なすぎる」、「もう少し自由度を」はともに1割程度である。「もっと精選すべき」はごくわずかであった。
- 「今後の英語の望ましい方向」については、「英語には音声が必須だからCDを付けてほしい」が半数を占めた。「今程度」と「自学できるようにすべき」がともに2割強であった。
- 「教科書の習熟度別学習への対応」については、「指導上で対応すべき」が半数あり、「教科書で扱わなくてよい」を加えると、3/4を占め、教科書での対応は期待されていない。ただし、「教科書だけ」のグループは「積極的に対応」が多くなっている。

Ⅲ. 保護者と教科書

1. 小学校

- 教科書への関心については、「じっくり見た」、「少し見た」、「めくる程度」を合計すると7割近くが教科書に目を通してしている。順位は、国語、算数、次いで、社会、理科、地図帳と続く。
- 「自分自身の興味・関心や勉強のため教科書の活用」は、国語、算数が高く、次いで地図帳、社会科、音楽、理科と続く。また、「じっくり見た」教科書は、国語が抜きんでて多く、算数、地図帳、社会と続く。
- 学校以外の子どもの様子については、8割の子どもが家庭、塾、などで勉強し

ており、その中で教科書を使って勉強する子どもが多く、子どもの勉強の中で教科書の役割は大きい。また、教科書を使って勉強する子どもの保護者は積極的に国語、算数の教科書に目を通してしている。

- 子どもの教科書の取扱いについては、ほとんどが大切に使用していると考えられる。
- 子どもの自宅での学習に対しては8割を超える保護者が「子どもが理解するまで一緒に考える」としている。
- 教科書の内容についての保護者の考えは、現状肯定派が4割弱、「すぐれた参考書や問題集のようにもっと工夫を」とする改善派が1/4であった。

2. 中学校

- 「自分自身の興味・関心や勉強のための教科書の活用」は、高校入試の対象となる教科である国・社・数・理・英の教科書が、実技教科より多い。また、保護者のほとんどが女性のため、女子中学生と同様、理科や地理的分野は不得手とする傾向が読み取れる。
- 学校以外での子どもの学習は、教科書が重要な役割を占めている。また、教科書への関心の高い家庭では、全体に比べ、「家族が教える」が倍増し、「一人で勉強」は変化なく、「あまり勉強しない」、「学習塾に通っている」は減少しており、子どもの家庭での勉強は家族の姿勢が大きく影響する。
- 子どもの教科書の取扱いについては、小学生と同じくほとんどが健全に使用している。
- 子どもの自宅での学習に対しては、「最後まで一緒に考える」のは小学生より3割減って半数となっている。

IV. 教科書の体様（…堅牢性を除く教師の意見については各教科毎に記述）

- 保護者については、ページ数は、「現行程度」が多いが、カラーページの割合は小・中学校とも「全ページ」が「必要な部分だけ」を大幅に下回り、判型、「書き込み、貼り付け、切り取り」は現状肯定派が多い。
- 堅牢性（表紙の厚さ、本文の用紙の厚さ、製本）は、教師、保護者ともに圧倒的に「現行程度」が多い。

V. 教科書制度

- 無償制については、教師、保護者とも大部分が「国独自」、「国あるいは自治体」の負担がよいとしており、国による教科書無償制は国民の間に広く支持され、定着している。

- 給与制については、教師、保護者ともに肯定率は高かったが、「教科によっては貸与制も考えられる」としたのは、保護者が3割を超え、教師が約2割であった。これは、給与制よりよいというよりは、内容、分量を充実してほしいという要望に基づいたものと思われる。
- 定価については、「妥当である」が最も多いが、「一般の書籍に比べて安い」とするのが、教師、保護者とする3割近くあった。
- 「よりよい教科書作りのためのあるべき定価」については、「現行程度の教科書が保証されるなら定価は国が定めてよい」とするのが、教師、保護者とも半数を超えもっとも多かった。
- 妥当な定価については、教師、保護者とも半数以上が、小学校では500円以下、中学校では500円～1000円であった。

第3章 まとめ

I. 各教科の調査結果から

1. 国語

- 教師も保護者も教科書に「読み物」としての文学的文章の充実を求めている。その際、定番的教材については、名作をじっくり世代を超えて読むべきという意見が強く、定番的教材と新教材のバランスある教科書作りが求められている。
- 言語活動については、教科書教材に対する期待は大きく、今後は、児童生徒の身近に起こりうる言語活動を自然な「場」を想定してトピック化するとともに、その中で児童生徒の言語運用能力の拡充が確実に図れるような教材化が求められる。
- 新学習指導要領で加わった小学校からの古典指導については、小学校では、遊びを通した親しみやすい内容への要望が強く、中学校では従来通りの内容でよいとする傾向があり、小・中学校での系統化を視野に入れた教科書作りが望まれる。
- 国語科における基礎・基本である漢字指導と文法指導については、教科書において系統化が望まれている。
- 全体の意見として、内容は充実させつつも、装丁は軽量化して子どもの負担を軽減させてほしいとする教師、保護者の意見が強かった。また、カラー刷りには抵抗が強く、一律ではなく、学年進行による柔軟な対応が求められる。

2. 社会

- 小・中学校ともに、教師の意識は「興味・関心・意欲」よりも「知識・理解」重視にあるので、その点に配慮する必要がある。
- 社会科教科書の望ましいあり方では、中学校が学習内容の厳選の対応に苦慮し

て「学習を発展させるための手立て」や「個人差に応じた指導」の選択率が高くなっていることから、問題解決的な学習に熟達していない教師に対する配慮が必要。

- 中学校教師は、補助教材・資料よりも本文そのものの充実、学び方よりも内容そのものの習得を求めている。
- 中学校社会科教科書については、三分野の特性を踏まえたきめ細かな教科書づくりが求められる。

地理…「資料活用能力」が重要な技能重視という特性

歴史…習得すべき事項・知識が多く、個人差による指導に苦慮する歴史学習の特性

公民…広範な情報と問題解決学習的思考・判断が必要という特性

3. 算数・数学

- 算数では教材的な教科書を望む声も多いが、抽象度が強まる数学になると、教材と学習材のバランスのよい教科書が望まれている。
- 算数・数学の教科書では、「全ページカラー化」より「必要な部分だけカラー」であればよい。
- 発展的な学習内容については、今後質・量の両面で改善工夫が求められている。
- 算数・数学、特に数学について、基礎・基本の徹底、定着のための繰り返し練習という観点から「練習問題の数」は増やす。
- 算数・数学の教科書の難易度は、現行程度でよい。
- 結果だけでなく、考え方や理由などを答えさせる記述式の問題は増やす。
- 教科書での習熟度別学習への対応は、数学での要求はそれほど高くないが、算数では必要とする意見が多い。しかし、一冊で習熟度別に対応した教科書を作るのは困難なため、教科書を水準別に複数種用意することも一つの方法。
- 数学教科書の改善・充実で最も重要なのは、練習問題や思考力を養う問題の充実。

4. 理科

- 小・中学校とも「教材、学習材のバランスのとれた教科書」を望む教師が多い。
- 経験年数の多い教師や理科を得意とする小学校教師本文、発展的学習、注などの分量については満足しておらず、「内容面の充実・増加」を求めている。
- カラーページは必要部分だけ、さし絵、図、写真などの数は現行程度など現行以上の視聴覚情報の充実は求められていない。むしろ、中学校においては、視聴覚情報の豊富さを見直す必要がある。

- 堅牢性については、重量の問題や書き込みをさせたいことから紙質についての改善を求める声がみられた。
- 教科書に掲載された観察・実験の記述が教師の指導に大きく寄与していることから、教科書には観察・実験の手順をより丁寧に記述し、安全面の配慮をわかりやすく記述することが求められる。
- 「新しい科学の知見や先端技術」「環境や環境保護」「日常生活の関連」については、最新の情報を含め、より豊富な資料の掲載が求められている。
- 写真、イラスト、図などは、それをもとに解釈されるので、正確さが求められる。また、教科書は、プロセスを直接体験しながら態度や方法を身につけさせるという理科の学習の道筋に沿って一連のつながった学習を成立させるものであるので、コンテクスト（文脈）を持つ必要があり、道筋を自覚できるような工夫も必要である。
- 教科書は、一元的なものでなく、自然探究の手引きとしてのワーキングブックと、習得の期待される知識や原理・法則など科学概念を主体とするリーディングブックに分けるべき。

5. 英語

- 「教材・学習材のバランスのとれた教科書」を望む教師が多い。ただ、1/4の教師が教材としての教科書を望んでいることは注目される。
- 「読む・書く・聞く・話す」の4つの活動については、文法中心のアプローチと会話中心のアプローチの対立が背景にあり、「話す・聞く」の構成について「読む・書く」とのバランスをとってほしいという要望が強い。
- 本文を構成する教材には関心が高く、もっと生徒が興味を持てる内容にすべきとする意見が多い。具体的には、「国際的な話題、文化のわかる話題、考えさせる話題」「平和・人権・環境問題など」「伝記物や有名な物語など」「時代の流れや変化に対応した内容」が指摘されている。
- 今後の英語教育の望ましい方向として、CDを教科書につけてほしいとする回答が過半数を占めたのは注目される。

II. 全体を総括して （略）

財団法人教科書研究センター

東京都江東区千石 1-9-28 (〒112-0012)

電話 03-5606-4311 F A X. 03-5606-3044 ホームページ <http://www.textbook-rc.or.jp/>